

【新聞活用学習】全校研究・社会科公開授業

～新聞活用を通して、主体的・対話的で深い学びの力を育む～

指定校 1 年次 原村立原中学校 太目 毅・平塚 広司

### (1) 本年度のNIE活用の概要

原中学校では令和4年度・令和5年度の2年間NIE研究指定校として、学校全体で新聞を活用した授業作り、学校創りを目指していく。

特に大事にしたいことは、ただ授業で新聞を利用することではなく、新しい学力観に基づく思考力・判断力・表現力をはじめとする身に付けたい3つの資質・能力を明確にするなかで、社会に目を向け、社会（人・モノ・こと）とつながる手段としての新聞を考えていくことである。現実社会と教科書学習（学習内容）をつなぐ、社会参画の手段として新聞を考え、有効に活用しようと実践をしていく。新聞を作る側（記者）の『伝えたい思い』に出会い、その出会いから何を感じ、どう考え、どう発信していくか、この一連の学習の中で、教科と社会とがつながっていく、非常に大切な手段になっていくと考えている。新聞を活用した実践により、子どもたちが確かな学びを保障できる学習づくりを目指す。

### (2) 本年度のNIE活動の取り組み状況

本校は、八ヶ岳の麓、豊かな自然に恵まれた全校生徒207名、各学年2～3クラスの学校である。

近年、情報はテレビやインターネットからという生徒も増えてきており、家庭で新聞に触れる機会がない生徒もいる。しかし、世の中の最新の出来事を一度に知ることができたり、文章を繰り返し読みすすめるなかで書き手の思いを感じたりすることができる新聞は、学びのツールとして多くの可能性を秘めていると考えられる。

そこで、1年目の今年度は、そんな魅力的な新聞に触れる機会をもってもらいたいと思い、教室に新聞を配達したり、授業で活用できようとして教師が新聞を読む機会を増やしたりといった取り組みをしてきた。

### (3) NIE活動のねらい

<新聞の教材的な価値について>

○読み手にわかりやすい工夫や社会的な諸課題が1つの記事に詰まっている。

○新聞記事を読み解くことで、社会的な諸課題が連鎖していることがわかる。

社会科の授業のなかでスクラップを活用した活動を繰り返し実践するなかで、生徒たちは新聞を読むことに対して抵抗がなくなり、より速い時間で記事を読み込む力がついてきている。学習のベースにスクラップがあり、「自分の考えを書く」「友達と回し読みする」など、授業のなかで様々な活用できる。新たな問いが生まれれば、今はいろいろなツールで何でも調べることができる。新聞を読むことが主体的、対話的で深い学びへとつながる入口になる。

教師の構えとしては、「生徒により近い位置に新聞を置き、少しでも新聞に触れる機会を多くする」「教師は教材として新聞の方が有効と判断した場合は、思い切って試してみる実践力が必要である」「もっと新聞を読みたくなるような教師からの積極的な働きかけも必要。その中で惚れ込んだ、力のある記事を授業中に使えることを目指したい」といったことを意識したい。

こうした実践を繰り返し、生徒が新聞を身近なものとしてとらえ、いつでも自然に新聞に手が届く姿を願い、取り組んでいきたい。

#### (4) 全校での取り組み

##### 実践1 2学年 社会科地理 日本の諸地域「東北地方」

###### 「過去の継承と未来に向けた社会づくり」

東北地方出身の先生に東日本大震災の体験を話していただき、その後で新聞記事を読み、当時の様子を知った。それぞれが感じたことを付箋に書き、模造紙に貼り見合った。

東日本大震災当時、生徒たちは4歳である。教師の実際の体験談として、災害時なかなか家の人を迎えに来られず不安を感じたことを聞いたり、複数の新聞記事を読んだりすることで、遠くで起きた災害を自分のこととして引き寄せて考えることができた。

##### 実践2 2学年 理科 天気の変化

###### 「スクラップノートを使って、毎日の天気の移り変わりについて調べよう」

授業前にスクラップノートにその日の天気図を貼り、気づいたことを記入する。これは、スクラップノートの新しい使い方である。身近な新聞を使うことで、手近に自分の教材として活用することができることに加え、毎日継続すれば、一研究としての資料にもなるだろう。

##### 実践3 3学年 「スクラップ教室（出前授業）」

生徒たちが情報を得るマスメディアに変化が起きている。以前は情報を得る手段はテレビが多かったが、最近では、インターネットから情報を得る生徒も増えてきている。そのため、情報を受け取るという姿勢から、自分から情報を取りに行くという主体性が見られるようになったが、反面、自分がほしい情報しか見ないようになり、視野や考え方がせまくなってしまふ。

このような時代だからこそ情報の一覧性の高い新聞は、広く世の中、世界を見る手段として非常に有効であるといえる。また新聞は、書き手と対話したり、主体的に記事を読みすすめたりするなかで、自ら問いをもちながら、問題を追究していくことができる。

そこで本校ではNIE指定校1年目の今年度、まず生徒たちに「新聞の良さを知ってもらいたい」「新聞に親しんでもらいたい」という願いをもち、「新聞の良さ」とは何かにスポットをあてて取り組んだ。

##### 実践4 3学年 社会科公民 「新聞記事から現代社会をのぞいてみよう」

社会科の公民の学習で現代社会がかかえる諸問題について新聞記事から読み取った。これにより、現代社会の問題についてのテーマを決め、自分たちの考えをもつことができた。成果物は、信濃毎日新聞社主催のスクラップ新聞コンクールに応募した。

###### 「託す1票 私の願い」

「物価高により、世界の貧困層が7000万人増えていることから、ロシアのウクライナ侵攻は他人事ではないと思った。食料自給率が低い日本にとって、この事態はとても厳しいと思う。家計負担額がどんどん高くなっていくから、対策がとても重要だと感じた。今回の選挙の争点にもなっているほど重点的に取り組まなければいけないことなんだなと感じた。」

「ロシアのウクライナ侵略や新型コロナウイルスの影響で自分たちの生活にこんな被害があったと知ることができた。選挙の時に物価上昇の対策を重視している人が多く、様々な人の生活に影響しているとわかった。県内の企業にも部品、原材料価格の上昇で経済が上手く回っていないと知った。中小企業にとって今はとても厳しい状況であると知った。自分たちにできることがあるかわからないけど、現状を知ってどのような対策をしていくのか見て考えていきたいと思った。」

### 実践5 3学年 「新聞記事から現代社会の人権にかかわる問題をさがしてみよう」

本校の人権教育月間に合わせて新聞記事から現代社会のさまざまな問題をさがしてみた。気づいたことは、人権に関わる記事が多いということだ。

国内だけでなく、世界で起きている人権問題にも目を向けることができた。「SNS の使用が悪質なものになるのは、ネット上で顔が見えず、人権の尊重を重んじることができていないからだと思った。SNS サービスの増加とともに、人権の尊重への呼びかけもしてほしい。」

2学年の教室では、「ジェンダー」に関わる記事が掲示されている。教室に掲示してあることで、自分たちの身近な問題として考えることができる。

### 実践6 1学年 社会科地理 「自分が作った社会科新聞と信濃毎日新聞を比べてみよう」

①信濃毎日新聞の記事は、どんな視点で書かれているだろう？

- ・世界の視点・第三者の視点、いろいろな視点
- ・だれでも見られるように、マンガなどを書き、工夫してある。
- ・読み手に伝わるように、見出しで内容をほとんど伝えている。
- ・注意を呼びかけている。
- ・一つの記事に一つの写真があるので、想像しやすい。
- ・今の情報と過去、これからの方針が書いてある。

②信濃毎日新聞の記事を読んで、わかりやすかったこと、伝わりやすかったこととは？

- ・見出しが大きかったり、見出しの色があったり、目に入りやすい。
- ・取材した人の印象が言葉で書かれているのでわかりやすい。
- ・一つの情報だけではなくて、たくさんの情報が入っていて、それぞれの成果、課題点がわかりやすい。
- ・その人の視点から書くことによって、使う人の気持ちがわかって読む側も使う人の視点になって読めた。

### 実践7 3学年 総合的な学習の時間 「SDG s について新聞で調べてみよう」

本校では、3学年は講座別に学習している。その一つがSDG s 講座である。SDG s についてまだよく知らなかった生徒たちは、「SDG s とは何か」を学習した後で、新聞記事から17項目に関わる記事をさがして自分が思ったこと、考えたことを付箋に書いた。

新聞とインターネットの両方を活用することで、主体的に追究する姿が見られた。

### 古着を集めて、発展途上国に送ろう



自分たちにできる社会参画について、新聞を導入（入口）にしながらかえることができた。

## （５）公開研究授業 ２学年 社会科（地理的分野）「日本の諸地域」

諏訪郡原村立原中学校 平塚広司

### 1 授業者の研究テーマ

「生徒に身近な社会的事象を教材化し、社会に対する関心や認識を深め、社会参画を促すための授業づくり～主体的・対話的で深い学びの実践を通して学びの力を育む～」

### 2 研究テーマに寄せて

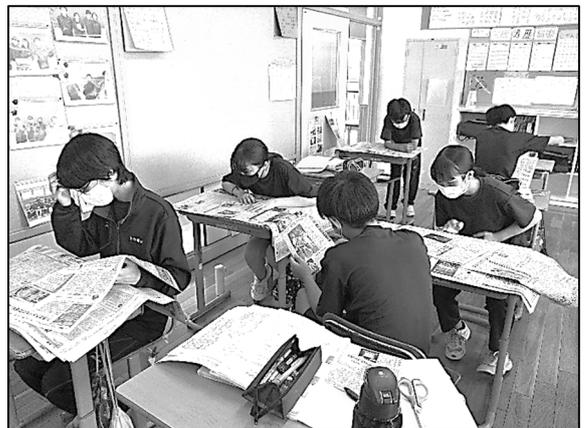
社会科の目標は、公民的な資質や能力を育成することである。私はこの公民的な資質や能力の育成について、今につながる先人の営み（歴史）や人々の暮らしの工夫（地理）に学び、現代社会のあり方（公民）から、よりよい社会を築いていこうとする意識や態度を育むことであると考える。そこで、身近な社会的事象の教材化につとめ、原中学校が学びの質を高める３カ条に掲げる、「聴く」（自ら求めて＝主体的）、「伝える」（筋道立てて、分かるように＝対話的）、「つなげる」（自分と仲間と、既習と新たな問いと＝深い学び）の積み重ねを通して、生徒が自分と社会とのつながりを意識することができるようにしたい。

### 3 研究授業の構想

生徒が自分と社会とのつながりを意識することができるように、２年「日本の諸地域」（地理的分野）の導入単元で新聞記事を活用した授業づくりに取り組んだ。本時のねらいは、「夏休みに制作した社会科新聞で自分が調べた都道府県（長野県を除く１県）にかかわる新聞記事を収集し、地域の特色をとらえるための５つの視点（「自然環境」「人口、都市・村落」「産業」「交通・通信」「生活・文化」）を基に分類することを通して、それぞれの視点を記事の内容から具体的に理解しながら、社会科新聞の編集後記で書き出したこと（その都道府県を調べてみて分かったことや考えたこと）にその都道府県の“今”を加えて、地域的特色をとらえ直す」である。新聞を活用することの効果として、私は次の２点を期待した。

- ・社会科新聞で自分が調べた都道府県の“今”を新聞記事から知ることができる。
- ・新聞のもつ「一覧性」（紙面を開けば、一目でさまざまな情報を得られる）を通して、自分が興味あることだけでなく、興味のないことも知ることができる。

特に２点目については、生徒は夏休みの課題として自分が訪れてみたい都道府県を取り上げ社会科新聞にまとめたが、当然主たる内容は自分の興味に偏ってしまった。そこで、夏休み中に発行された実際の新聞でその都道府県にかかわる記事を収集し、興味のなかったことや知らなかったことにも触れることで、社会科新聞でまとめた都道府県の特徴（編集後記）を自ら評価するとともに、とらえ直すことができると考えた。そのためには一通り集めた記事を「地理的な情報にする」ことが必要であることから、地域の特色をとらえるための５つの視点（「自然環境」「人口、都市・村落」「産業」「交通・通信」「生活・文化」）を基に分類させるようにした。そうすることで、これから学習していく日本の諸地域で活用する５つの視点を記事の内容から具体的に理解することもできる。そこで、本時で記事を分類する場面では、記事のどの部分がどの視点と関連するかを問うようにして、自分が根拠にした記事の見出しや文章に線を引かせるようにした。



記事を集める場面では、一人ひとりに異なる日付の新聞を手渡した。そこで、誰がどの都道府県を調べたかが分かるようにして、見つけた記事を互いにやり取りするように促した。

## (6) 生徒の反応

### 愛知県を取り上げたM生の学びから

社会科新聞で愛知県を取り上げたM生は、記事の収集にも意欲的に取り組み、友だちが愛知県にかかわる記事を見つけると、とにかく欲しがった。学級の中で一番多くの記事を集めたいだろう。果たして5つの視点から分類し切れるのか、集めた記事の全部を使おうとしないかと心配になったぐらいである。

#### M生が本時に作成したワークシート

本時、M生は5つの視点について、1つずつ記事を選んでワークシートに貼り出した。「人口、都市・村落では、中部国際空港と米国ハワイ・ホノルルを結ぶ定期便の運行が2年ぶりに再開された記事を、「産業」では、後継者不足に悩む農家から水田の耕作を託され、完全有機栽培のコメで酒造りに挑む若手醸造家の記事を取り上げた。これらの記事と社会科新聞の編集後記を基に、愛知県の特色を次のようにとらえ直した。

愛知県は気候や地形を生かした特産物をつくっていることを知れた。世界とつながりがあるということを知らなかったのがこの機会に知れた。愛知県からハワイに行けたりするから中部地方に住んでいる人も東京や大阪まで行かずに外国へ行ける役割を担っていると感じた。

社会科新聞では愛知県の食文化を取り上げていたM生であるが、若手醸造家に関する記事中の「地域の特性に合わせた品種の開発」というキーワードから、興味を持った特産物が愛知県の気候や地形を生かしたものであることに気づくことができた。また、定期便の再開に関する記事から世界との結び付きに気づき、「役割を担っている」という表現で、外国との窓口としての特色を具体化することができた。授業の終わりにM生は、「自分で調べると間違った情報が含まれることもあるけれど、新聞の方が細かく正確に書いてあった」と感想を述べた。M生が述べたことは新聞の特性を見事に言い当てているだろう。

## (7) 今後の課題

### ～研究授業から見えた成果と課題～

成果として、新聞を活用することの効果として私が期待した前述の2点を、生徒自身も感じられたことが挙げられる。社会科で学んでいることは決して受験対策用の知識や技能に留まるものではなく、自分と社会をつなぐ架け橋となることを実感できたのではないだろうか。一方課題として、これだけ有用性のある新聞ではあるが、購読する家庭が減少していく中で、生徒にとって必要感のあるものとして新聞を教材化できたかが挙げられる。今回授業を始めるにあたり、生徒に普段新聞を読んでいるか尋ねたところ、20数名中2名ほどしか手が挙がらなかった。しかし裏を返せば、意図的かつ効果的に新聞に触れさせられるチャンスでもある。

M生が言ったように、新聞は「細かく正確に」書かれている。また、新聞はネットやSNSのように一過性の（すぐに消えてしまう）情報ではない。たとえば教科書に記された内容を、記事を通して“今”実際に起こっていることから具体化したり検証したりと、新聞を活用するからこそ成立する学びがある。繰り返しになるが、私は生徒が自分と社会とのつながりを意識することができる学びの素材として、今後も新聞を授業の中に位置付けていきたい。

### ～全校の取り組みから見えてきた課題～

本校は学習指導において、知識・技能等の習得のみを目指すのではなく、自ら課題をもち、分かりたい、解決したいと思える授業、魅力ある授業を目指している。

そのうえで教科によっては「どのような力をつけたいか」（どんな資質・能力を身につけさせたいか）を明確にし、「新聞を使う意図」を明確に持つことが必要であることも感じた。

新聞には多く生きた情報が詰まっており、単元によっては新聞の方が主体的、対話的で深い学びが実現できる教材であると実感した。まずは、教師自身が新聞を手にとってみる。そこが入口であると思う。

世の中には多くの情報、向き合わなければならない課題が溢れている。いかにこれらの情報を有効に活用し、確かな学びを実現するか。そして、新聞を読むことを手がかりにしてどう問題を解決し、豊かな社会、豊かな人生を築いていくか。いつも新聞をそばに置き、進んで情報を活用していく態度が大切だと思った。